

「憲法九条と平和は私たちの手で守ろう」

国枝 務

昭和16年、私は国民学校1年生となり、その年に太平洋戦争が始まった。戦争は4年間続き敗戦の形で終戦を迎えた。この中で決して忘れる事が出来ないのは昭和20年7月9日の岐阜大空襲だ。米軍の爆撃機B29が落とす焼夷弾はザーと雨の降るように聞こえ、それがヒューツと変わると危険だった。すぐに耳と目を覆って身を伏せた。落ちた音が胸に響き伝わってきた。「生きているぞ」すぐに立ち上がって逃げた。ただひたすらに……。次々と風を切って襲ってくる爆弾に目と耳を塞ぎ、身を伏せながら走った。こんな繰り返しで体力も尽き果てた。道路は逃げ惑う人の群れと叫び声で大混乱。どこまで逃げても火の海だった。兄弟7人はバラバラになってもお互いに呼び合って母を中心に固まって走った。どこまで走っただろうか。母が「もう、諦めよう。みんな一緒に死のう」と……。折しも7月、田圃に用水が流れていた。不思議にも長姉が夏蒲団を持って逃げていた。これを用事にひたして頭にかぶった。もはや逃げる気力も体力もなくなった。弾丸の震動が身体に伝わってくる。「蒲団が燃えている！」という声にすぐ用水に入れ、もみ消し再び頭に被った。道路に落ちた焼夷弾の爆発で火が付いたのだから。一枚の布団が家族の命を救ってくれた。

夜が明け、人の声が聞こえて来た。ずぶ濡れの身体も気にならず、励まし合って家族みんな歩き始めた。が、すべての家々が焼け崩れてしまい、看板や家の形などの目印が無くなってしまつて、どのように帰って良いのか分からなかった。焼け跡では誰もが途方に暮れていた。

誰かが「あつ、あの煙突は我が家の近くの会社だ」。その煙突を指指して自分の家跡を見つけた時の安心感。嬉しかった！ 焼け落ちた我が家には手汲み井戸ポンプが残っていた。

近くの防空壕の入り口から薄煙が上っていた。後で父から不発弾が2発落ちていたと聞いた。逃げだして良かった。逃げる途中で入った防空壕は直撃弾を受けて崩れていた。この中に避難していて、念仏を唱えていた人やあとの人たちは全滅だったのだろうか？ そんなことを考える心の余裕はなかったが……。焼け跡に立ちつくしている避難途中で別れていた父が戻ってきた。そこで親類のある揖斐郡大野町を目指して歩き始めたが、忠節橋が焼け落ちたという噂を聞き、近所の人たちと長良川下流の渡し船まで行く事になった。そこは多分「小紅の渡し」でなかったらうか。澄んだ流れの中に小魚が数匹泳いでいるのを見つけた。何と美しく平和であることか。昨夜の出来事は何だったのだろうか。夢の中の出来事か。いや、そんな事は無い。泥だらけの服とみんなの顔は逃げ疲れた顔だ。この違和感にとらわれたことは今になっても思い起こす。いつの間にか靴も脱げていた。重い足を引

きずって北方町の警察前まで来ると、空襲を受けた避難者がこの道を通るだろうと「非常炊き出し」をしていた。そこでおにぎりを食べて休憩したら安心感と同時に疲労から足が出る元氣もなかった。しかし、本当の苦しさはこの日から始まった。軍国少年だった私は、この日からすっかり反戦少年に変わった。

特に、翌月の八月十五日疎開先で終戦を知った時に「何故もつと早く終わってくれなかったのか」とつくづく恨めしく腹が立ったものである。

今、ウクライナの避難の人たちはどうしているのだろうか。我々の体験と重ね合わせると一刻も早く戦争をやめて欲しいと強く思う。戦争の犠牲者は一般人である。何の言われも無いのに苦しむのは一般人である。今、日本ではキナ臭い感じがする。憲法九条の問題、防衛予算の増大等々。終戦後つくった憲法の精神はどこへ行ってしまったか。平和憲法を変えようとした人を国葬にし、国内の反対を押し切ろうという不思議な現象を今や日本国民は黙っていて良いのだろうか。今、日本は危機的な状態にあるのだ。かつて日本が突き進んだ誤った道を再び辿ってはならないと強く思うものである。決して、他人事と考えていてはならない。正しく民主主義と平和を守る日本であらねばならぬ。

昨年九月より今日までに三八名の方より
九五五〇〇円のカンパを頂きました。
どうも、ありがとうございます！